

## グループ紹介

夢を実現化する企画集団

### 〈アイデア・ポックス〉

「富士市で開かれた「富士女性フォーラム」で知り合った有志が、学びあうだけでなく、実際に行動に移していこうと呼びかけ、集まった元気いっぱい仲間が「アイデア・ポックス」です。昨年は映画「ベンボスタ・子ども共和国」の自主上映に取り組み、会場手配から券の販売まですべて自分たちの手でやりとげました。富士市保健婦人センターの発行する情報誌「ボンエルフ」(オランダ語で生活の庭の意味)の編集にも協力するなど幅広い活動をしています。

メンバーは現在七名で年代も二十代から四十代と様々ですが、身近な問題を話し合う中から生まれた企画を実現させるといふ思いはひとつ。個性と能力に富んだメンバーたちが週一回婦人センターで、女性や生活者の視点を大切にした新しい働き方や仕事を考え、実現化へ向けて、ミーティングを重ねています。

連絡先 富士市川尻四四二一四  
電話 〇五四五(3)一二七七  
代表者 山崎 ひろみ



### 温かなおはなしで子供の環境づくり

#### 〈なんぶ おはなし□□ソク〉

「おはなし」のよさを、楽しみながら知ってもらおうと「おはなしローソク」が発足して十年になります。

南部公民館で、月一回、担当を決め、子供たちにお話をします。昔話から、新しい物語まで、何にでも挑戦します。週一回の例会では、「どうしたら子供たちが喜ぶか」を話し合ったり、自分たちで、紙しばいを作ったりと、熱がこもります。このごろは、聞かせるだけでなく、子供たちにも参加させたりと、十年前とは少しずつ内容が変わってきました。昔話や、七十七歳のメンバーの一人が聞かせる「戦争体験の話」は、大切に伝え残しています。

グループの九名は、個々にも活動しています。「依頼があれば、おはなしの出前」もします。そして、若い方にもどんどん参加していただいで、新しい風を吹きこんでほしい」と意欲的です。



連絡先 静岡市宮本町五の十八  
電話 〇五四(3)三四〇六  
代表者 志村 美子

### そばの里

#### 〈野田山びこ会〉

佐久間町城西から、曲がりくねった道を車で十分。登り始めると野田地区の集落が見えてきます。目の前をふさぐ山。夕陽のあたる石垣に、したたり落ちる水が凍りついています。朝晩の冷えこみがいよいよ厳しい一月。集まっていたいた會員の皆さんの表情の明るさ、快活さに驚かされました。

山びこ会は、野田地区の婦人三十代から六十代までの會員二十一名。茶園の講習、野菜作りに始まり、余剰野菜や保存食のイベント(物産展など)への出荷、地そば作りなど活発に活動しています。物産展では立派な野菜が安く手に入ると評判がよく、出荷のたびにとぶような売れゆきです。地そば作りも、もっと研究していいものを作ろうと、昨年二月、静岡市のそば作り名人を招いて講習会を開きました。前向きに活動する婦人たちの熱気に、冬の寒さもふきとんでしまいたいそうです。

地そば..地元材料を使った手作りそば  
連絡先 佐久間町奥領家一〇七二番地  
電話 〇五三九(3)〇八九七  
代表者 亀久保 保子



## 静岡に住んで

### ロビン・フォン・ヘーゲンさん

英語教師・ドイツ出身。1974年来日。東京出身の鍋島りかさんと結婚。子育ての環境を求め、東京から伊豆に移り住む。昨年7月、松崎町に手作りのマイホームを建て暮らしている。



#### へ日本そして出会い

ロビン・フォン・ヘーゲンさんはドイツ・アーヘン出身です。学生時代は建築を専攻していました。音楽好きで日本の楽器の尺八を学ぼうと一九七四年、日本に来ました。八年間東京に住み、独協大のドイツ語講師をしていた時、学生だった現在の妻であるりかさんに出会いました。東京にいた時二人で半年ちかく、世界中を旅行しました。母国のあるヨーロッパをはじめ、アジア各地（ヒマラヤ、パキスタンなど）を回り、さまざまなお会いに刺激を受けて、日本にたどり着いた時、もう東京には住めないと思いました。新鮮な空気、おいしい水のあるところへ脱出したいと、帰国後一か月もたないうちに、伊豆へ引っ越すことに決めました。

#### へファミリー紹介

ロビンさんの家族は、妻のりかさん、五歳の長女まやちゃん、三歳の長男一弦（いちげん）君、猫のキーファ、フレディ、サリーの四人と三匹の大家族です。中でもキーファはロビンさんが東京にいた時に拾った猫でもう十一年のつきあいになるそうで、堂々たる風格（？）の持ち主です。

#### へマイホームについて

ロビンさんがほとんど自分で手掛けた手作りの家は、ドーム屋根で、内部は、昼間は日ざしがさしこむサンルーム風の広々としたリビングがあり、空間を生かした設計が周りの自然に溶けこんでいます。現在も内装の一部は未完成で、仕事の合間にコツコツとひとり作業をしています。

#### ロビンさんのお話から

##### へ日本の女性について

日本人は親切で正直という印象は昔も今も変わりません。でも、本当の意味で心をオープンにしてほしいと思います。例えば人間関係で問題がおきた時、ヨーロッパ人はイヤなことも隠さず話し合い解決しようとはしますが、日本ではハッキリさせずに、円満にその場をおさめようとします。日本の女性についても、悩みなどを表に出さず一人で抱えこみ、解決しようとはします。表に出さないことが美德とされているせいかもしれませんが、ストレスがたままるのでは…。

##### へ子育てについて

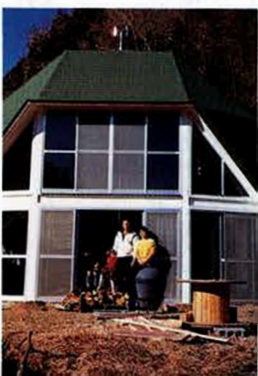
日本の子供を見てみると、モチーフ、つまり何かをするための自発的な動機がないように思います。子供時代は人生の一番自由な時期

なのにおしつけが多いために子供自身が何をしたいのかわからなくなってしまうのです。親の先入観をうえつけないことが大事だと思います。子供には人生の本当に必要なものを学んでほしいです。大事なことは、自分の中にある才能を信じて、それを自分で伸ばすことです。なぜなら自分を育てる喜びなしに人生の喜びはないからです。

##### へ夫婦について

国際結婚はどちらも正しいことを理解しあう一つのチャンスだと思っています。お互いが違うことを理解しあい、二人がうまくやるためにはどうすればいいか問題をかくさずオープンにすることが大事だと思います。これは国同士にも言えますね。

また、結婚したことで相手の成長をさまたげないことが大切です。なぜなら人生は夫婦がお互い成長しながら前に進んでいくものだからです。





# —ねっとわあく らいぶらりい・本との話—



マルユ一書籍販売株式会社

この本を読んでいくと、胸をえぐられるような気持ちになります。それは、今までに自分がどんなに子供の伸び伸びとした心を押しつぶしてきたか、思い知らされるからです。

私たち親は誰でも子供を叱ります。子供のためという大義名分を持って。でも、本当に子供のために叱っているのでしょうか。

泥だらけになって帰って来た子供を大声で叱るとき、それを脱がせるのが、片付けるのが、洗濯するのが大変だから……という理由で叱っていませんか。電車の中で騒ぐ子供を叱るとき、子供を飽きさせないように相手をしてやるのが面倒で、自分が居眠りをしたいから……それで叱っていませんか。親の気分、親の都合で叱っていることがどんなに多いでしょうか。この本は、東京新聞や中日新聞などに連載されたコラム「叱らな

いしつけ」をまとめて作られました。連載中、私は、週一回のこの欄を読むのがとても楽しみでした。そのたびに、はっとさせられたり、うなずかされたり、考えさせられたりしました。

友人にも、知らない人にも、子供のいる人、いない人、多くの人たちに是非読んでいただきたいと思います。手をかけるばかりが愛情ではない。こごとを言うばかりがしつけではない。子供が本来持っているのびやかさ、おおらかさ、好奇心、向上心。それを、温かなゆつたりとした目で見守り、育てていきたいものだと思います。

「親や家族から『思いやり』を受けている子供は、自然にその心に思いやりが芽生えます」

「子供が嘘をついた時——親が子供を罪人にするような態度に出るのは、何とも悲しいことです」

「子供に問題が起きた時、子供を非難せずに、自分の人格や子育てを反省し、育て方の誤りをただすことです」

—本文より—

## 新刊紹介



地球と子どもたちへの「環境パスポート」  
「環境破壊は地球の病気。みんなで地球を救おう。」と子供たちに呼びかけ、考え直す本。リサイクルの例を、おもしろいイラストで説明。この本が再生紙を使っているのもいい。

ほんの木 五〇〇円



「男はどこにいるのか」  
小浜逸郎著  
男性について考えることは、女性について考えること。現代において、男性が男性として生きるとはどういうことかを考える。

草思社 一、六〇〇円



「メイプル夫妻の物語」  
ジョン・アップダイク著・岩元巖訳  
現代アメリカを代表する作家であるアップダイク自身の結婚生活を反映した作品。一組の平凡な夫婦の崩壊する過程が、17編の短編で時間の流れとともに綴られていて共感を呼ぶ。

新潮文庫 四八〇円



「母と子の絆」  
宮本健作著  
母子間の相互の交流は、すでに胎児期に始まる。自然発生的に生じると考えられているこの母と子の絆の本質と意味とを考察する。

中公新書 六〇〇円



「夜のチョコレート」 森 瑤子著  
ひとたび過ぎ去った時間は、決して取り戻せない。自分に常に種をまき、それを育てることを考えよう。著者からの耳の痛い、けれど温かいメッセージの数々。素敵な大人の女性になるためのマニュアル。

角川書店 一、〇〇〇円



新春早々、我ら若年寄夫婦、南アルプスのふもとのひなびた温泉に泊まり、翌朝、南アルプス林道方面へ向かった。途中から車は冬期閉鎖で通行止。さらに歩くと、夜叉神トンネルにはフタがしてあり、小さな扉がついていた。中をのぞくと、凍るような冷気で暗やみの中にかすかに一点、光が見える。ゆうに二キロはある真つ暗なトンネル。でもその先には南アルプスの北岳が顔を見せてくれるはず。私たちは山の誘惑に負け、暗黒の世界に入ってしまった。

はるか一点の光の世界をめざして二人でひたすら歩く。手さぐり、足さぐり。無謀さを

長電話大好き

先日、PTAの集まりで長電話の話が出た。皆、「長電話で困っている。」「十五分で切る様に指導している。」などの意見が出た。

その中で、反対意見を言うつもりもなかったが、「お宅はどうですか。」と聞かれ「私は長電話大賛成です。」と言った。皆少し驚いた様子だった。「人間かつこ良くばかりは生きられないと思います。誰かにぐちをこぼし、聞いてもらいたいものだと思う。そんな話ができる友だちのいる人は、幸せだと思います。子供を助け、支えてくれるのは友だちだと思っているので、楽しそうに長電話している時は、

後悔しても、手遅れだ。お互いの手だけが命綱。暗やみの中で私はふと、現実世界のことを思った。夫婦として歩き出して早や二年。新生活を始めた当初はすべてが輝いた光の世界のはずだった。が、現実は甘くない。この手さぐりの暗黒の世界に二人で無謀に出発したのと同じだ。だが、私が今、命綱にしている連れ合いの手はいつも私の横にあるだろう。多分彼にとっても私の頼りない手が命綱だ。歩きはじめた以上、二人で進まねばならない。やがて光の点が円になり、トンネルも終わりに近づいた。輝く光の世界に出ると、南アルプスの北岳の素晴らしい眺望が、この頼りなげな夫婦をにっこり笑って出迎えてくれた。

ホプリ



かえってほっとします。」と述べたところ、他の方が「それでハロー電話がはやるんではないか？あの電話は、一日に百件以上もかかってくるって言ってたけど、淋しい人が多いんじゃないか？」と言った。

長電話がいけないというのは、その間にほかの電話がかかってくるかもしれないというだけではないか。それだったらキャッチホンにすれば解決！この私も友達と一時間は平気でおしゃべりする。うーん一時間か。いくらかかな？女のストレス解消が何百円かで済むなんて安いものだ。今はちよっとおすましの我が家の電話。いつも御苦労さま！へーい

遠い日

小学校時代、そんなに何度も断水があったのだろうか。カンカン照りの運動場を斜めに横切り、一番近くの農家まで水を飲みに行ったその場面は、今でも鮮やかに思い出される。汗をかきかき、競争のように農家までの細い坂道を、みんなでかけ上った。何人もの列ができる、次の授業に間に合わないことがあり、さらに急な道を上って、別の家の水を求めた。

この間、ふと、あの農家はいつたどの家だったんだろうと考えてしまった。自然に恵まれた私たちの町も、生活の便利さと引きかえに、昔とはすっかり様相を変えてしまっている。広い運動場をぐるりと道路が囲み、水を飲みに行った石ころだらけの坂道は、今ももう存在しない。

道路を横切った二軒目の家だろうか。そこからも、ずっと奥まで林道が走り、昔々大きな山々と思っていた月夜平までは、道路を歩いて十分。

理科の時間に虫や植物を探したのか、八幡様から月夜平までの山道を、友達と歩いたのがとても楽しかった。おおいかぶさる木々がトンネルのように続き、カサカサ敷きつめた枯れ葉を踏みながら、かけ下りたあの長い長い山道も、今探しても見当たらない。

澄んだ空気にチャイムが鳴り響き、子供たちの歓声は、今もにぎやかに空にこだまする。この子供たちは、どんな情景をまぶたに焼きつけて、遠い日を思い起こすのだろうか。

(故郷を愛するM)



静岡県のみなさまへ



ちょっぴり冷たい緑の風が、一年前の私たちを  
そっと運んできてくれました。色鮮やかに懐しく……

春うららかな日、好奇心旺盛な6人の女性が何かを求めて集まりました。  
出会いは期待と不安のなか……

よりよいものにしたいから、いろんな意見が飛びかう企画。  
バラエティーに富んだキャラクター揃い。

胸が高なり、期待が大きい。  
逢うまで自分の描いたシナリオを心の中でつぶやく……。

“取材、という言葉がなんとも嬉しい。  
取材時の新鮮な驚きと感動をそのまま伝えたい。どう原稿に表現していこう！”

いよいよクライマックス。全体のバランス、リード文をそえて……  
編集という、一冊に仕上げることの難しさ！

こうして今、18号の完成を目前にして後悔もありますが、私たちの心に強く残  
されたものがあります。それは新しいことへの挑戦の喜び、違った視点での物の  
見方、たくさんの人との出会いと感動です。生活に埋もれることのない向上心と  
まわりを見つめる新鮮な目をいつまでも持ち続けていきたいと思っています。



須山照子 鈴木和子  
鈴木ミチ代 萩原邦子  
新井博子 土居圭子より

女性のための情報誌

「ねっとわあく」第18号

平成3年3月

編集・発行 静岡県県民生活局 婦人課  
〒420 静岡市追手町9番6号  
☎ <054> 221-3122

表紙デザイン

県浜松繊維工業試験場 小杉思主世

おしらせ

- 一、平成三年度静岡県婦人の海外研修団員を募集します。
  - 二、この情報誌の「女性編集員(五名)」を募集します。任期は三年度一年間で、年間十五回ぐらいの編集会議と取材が主な仕事です。
- 申込み等問い合わせは、左記婦人課まで。